

## その後のアフガン農村 憲法草案発表のなかで ( 現地報告)

著者	鈴木 均
権利	Copyrights 日本貿易振興機構(ジェトロ)アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) <a href="http://www.ide.go.jp">http://www.ide.go.jp</a>
雑誌名	現代の中東
巻	36
ページ	82-89
発行年	2004-01
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2344/00005786">http://hdl.handle.net/2344/00005786</a>

# その後のアフガン農村

憲法草案発表のなかで

鈴木 均

## はじめに アフガン農村への接近

2003年10月31日、アフガニスタンを初めて訪れた。初めての土地に僅か2週間ほど赴いて農村部の状況を垣間見るためには、少なくとも何らかの仕掛けを用意しなければならない。イラン研究者である報告者はペルシャ語を解するため言語上の障壁はあまり問題ではないと思われた(もっともアフガニスタンの言語状況についても伝聞情報だけでは必ずしも確信を持てなかったのであるが)。そこで報告者が参考にしたのは、アフガニスタンの農村部について書かれた文献である大野盛雄『アフガニスタンの農村から』(注1)と、70年近く前に同国に3年間滞在した尾崎三雄の『日本人が見た30年代のアフガン』(注2)という二つの先行研究であった。

とくに前者の『アフガニスタンの農村から』は1970年に4カ月余りを費やした日本人調査団のフィールドワークの報告書であり、アフガニスタンの二つの農村の具体的な人物が10~11人も実名・写真つきで紹介されているなど、今回のような調査の

手掛かりとするにはまさにうってつけであると思われた。二つの農村というのはカーブルから南に70キロの「ピアルーヘイルむら」(注3)とヘラート近郊の「カバービアン村」である。日本で入手できる地図では村の位置すらもはっきりとしないまま、またアフガニスタンでたとえ短期間とはいえ農村調査というものが可能なのかも判然としないままに報告者は多少とも住み慣れたテヘランを経由してカーブルの空港に降り立ったのである。

アフガニスタンの農村の現状を調査すると



ヘラートのパン焼き屋。イランと変わらない風景である。アフガニスタンは都市部にはパン屋があるが、農村部では未だに各家のパン焼き窯でパンを焼いている。

いっても、実際にはさまざまな観点からの調査・観察があり得る。それらの主要なものを思いつくままに挙げてみれば、農村部における社会構造の分析から始まって、階層分化、土地所有および水の分配、主要作物および家畜、遊牧民との関係、近隣都市との関係、行政関係、宗教組織、教育の問題、女性の地位、保健衛生などの諸分野が考えられる。大野の『アフガニスタンの農村から』はこれらのうち社会構造、階層分化、土地所有および水の分配など農村社会を構成する最も基礎的な諸条件について、二つの農村の事例に密着して分析したものである。

だが今回の現地調査についていえば、ひとつには滞在期間が全体で2週間程度と短く、また報告者自身のイランにおける現在の関心が近隣都市との関係や行政関係に向いているということがある。また農村調査といってもアフガニスタンにおいては1979年末のソ連軍侵攻以降20年以上にわたった戦争状態の結果、本来あるべき農村部のコミュニティーが相当程度破壊されているのではないかとすることも予想された。さらにそのことを象徴的に示していると思われたのが、アフガン農村部で広く行われるようになったケシ栽培の存在である。これらの変化が農業国アフガニスタンの地方社会をどのように変容させたか、またアフガニスタンの社会を都市部だけでなく農村部まで含めて長期的に復興させていくためにはどのような根本的な問題があるのか。これらの緊急でありながら誰も答えに窮するような難問に短期間の表面的な観察だけで答えを求めるのは余りに無謀であるとは知りつつも、フィールドワークをこととする地域研究者としては、極端に情報の少ないアフガン

農村部を垣間見る今回の貴重なワンチャンスに賭けてみたという次第である。

### カパーピアン村で

カパーピアン村はヘラートの町を出てから6キロほどの距離にある(大野『アフガニスタンの農村から』では2キロと書かれている<sup>(注4)</sup>)。最初ヘラートのホテルでチャーターした4WDの運転手が同村の位置を知らず、北側の未舗装道路から迂回して入ったが、実際は空港へ向かう道を途中で左折した直ぐのところに位置していた。

我々が村に入ってすぐに向かったのが、この村最大の建造物である金曜モスク(masjed-e jame')である。そして村にはいささか不釣り合いなほど立派なこのモスク(村人の話では2年ほど前のターリバーン政権末期に建てられたという)で最初に見ることになったの



カパーピアン村のモスク。村に不釣り合いなほど立派な建物はターリバーン政権の末期に建てられた。子供がタ方の礼拝をしている。

が、村の子供たちの授業の様子であった。説明を聞いてみるとこの村の教育はモスク (masjed) と学校 (maktab) の両方で行われており、モスクでは宗教教育を、学校では科学教育を担っていて、多くの子供はどちらにも通うということであった。報告者が訪れた時期はたまたま学校が休みだったため、モスクでの教育のみ目にするのが出来たということなのであろう。現在カパービアン村ではアメリカの援助で学校の新校舎を建設中とのことで、行ってみると村外れの畑のなかに広々とした校庭のある2階建ての立派な校舎が正に建設途中の状態であった。

一方モスクでの教育はどんな様子かといえ、薄暗い部屋に80人からの男女生徒(男子生徒45人、女子生徒35人)を集め、1人の先生がすべて面倒を見ている。生徒たちはおなじ部屋の中に男女別に集められて壁沿いに座らされ、各々勝手に教科書を広げている。使われている教科書は『コーラン』のほか『パンジュ・ケターブ』<sup>(注5)</sup>などと呼ばれるペルシャ語の古典散文の抜粋本で、これをテヘランに持ち帰って50代の知人に見せたところ「父親の世代は寺子屋 (madrese) でこれと同じものを使っていた」と懐かしそうに手に取ったような代物である。だがこれらは内容的に子供に容易にわかる文章では到底なく、それをただモッラーの指示に従ってひたすら読誦し続けるのである。

この村のモスクでひとつ失敗談がある。集まっていた子供たちにお土産を渡そうと車まで戻り、4,5本のボールペンを取り出したところ、20人程もの子供の手が一斉に伸びてきてちょっと収拾がつかなくなった。そこで立ち往生して困っていると、先ほどまでモスク

の教室で子供たちに教えていたモッラーが近づいてきたので「あとで子供たちに公平に分けてやって下さい」とボールペンを手渡した。するとこのモッラーの先生は、いつも教室で使っている木の枝の鞭を持ち出してきて子供たちを追い散らしてしまったのである。その後子供たちが「ボールペンはあのモッラーが全部取ってしまったよ」と訴えてきて後の祭りであった。

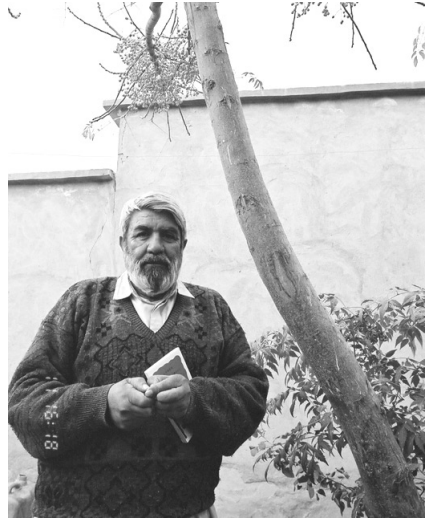
さてこのようなモスクが現在この村では13あるという<sup>(注6)</sup>。大野盛雄が調査した1970年の時点では6カ所であった。大野の記述によれば「このむらはその居住地区を六つに区切って、それぞれに一つずつのマスジェド (=モスク 引用者注) がある」<sup>(注7)</sup>ということで、それを敷衍して考えればこの村の現在の人口は30年前の2倍強(つまり約4000人)ということになる。だが実際には村の人口増加率はモスクの数の増加を遙かに凌駕しているようで、インタビューを行ったアルバブ(村長)からも明確な数字は得られなかったが、現在この村の人口は6000人から7000人いや場合によると1万人に及ぶのだという。確かに訪れた金曜モスクでも他のモスクでも、子供の数がやたらと多いようである。

ところがそれでは急激な人口増加がイランに見られるように人口の移動や農村社会の構造的変化、生産構造の変化、あるいは周辺農村や都市との関係の変化を引き起こしているかという点、どうもそうではないようである。複数の人間から得られた説明は、「人口が急増しているのはなにもこの村だけではない。周辺の農村も一様に人口は急増しており、一方で農村と都市ヘラートの関係は各々個別的なものであって、どこかの農村が流通

などの中心となるような現象は見られない」というものであった。そしてこれだけの人口圧力をどのように解決しているのかと問うてみたところ、とにかく深井戸(chah-e amiq)をたくさん掘って農業生産力を上げるよう今のところ努力しているのだという。だがこのような対症療法では、いずれ遠からず村の人口吸収力が限界に直面することは自明であるように思われた。このことから導かれる一つの結論は、アフガニスタン国内のとくに人口が急増している地域において、早急に何らかの人口抑制政策を採る必要があるということである。

ところでカバーピアン村では当然ながら大野『アフガニスタンの農村から』の登場人物あるいはその関係者を探ることになった。そしてすぐに巡り会えたのがアブドゥルバーギーの息子アブドゥラー・モンシーザーデ氏である。アブドゥルバーギーは大野の記述によると「このむらの金持ちの一人」であり、「一族は総じて知識人であり、都会の住人としての行動様式を示している」という人物であった<sup>(注8)</sup>。その日アブドゥラー氏は突然急用ができたため翌日改めて同氏の自宅を訪ねると、敷地内には新しい家屋が建てられていたが、報告者は30年前にもあったという古い方の一角に招き入れられ、丁度ラマザンの断食の最中であつたにもかかわらずチャイを振舞われて歓迎された。その後ビデオカメラをセットして30分ほどインタビューを行った。

アブドゥラー氏の話によると、この村もソ連の侵攻時代(1980~88年)はヘクマティヤール率いるイスラーム党の許で戦つたのだという。アブドゥラー氏の旧宅は当時ソ連軍によって破壊され、一家はヘラートに一時疎開



アブドゥルバーギーの息子アブドゥラー・モンシーザーデ氏。33年前の日本の調査隊のことをよく覚えていた。

していた。その後もターリバーン時代には礼拝(namaz)や男性の髭、女性のヘジャービー(いわゆるブルカ)など厳しい宗教的指導が行われ、厳しい時代が続いたが、現在では平穏な生活を取り戻しつつあるとのことであつた。彼はさすがに数日前に発表された新憲法の最終草案(後述)のことをラジオの放送を通じて知っており、既に新聞で本文も読んでその内容を高く評価していた。その後家の周囲の畑などを案内してくれ、さらにアブドゥルバーギーとハーギー=ジャンムハンマド<sup>(注9)</sup>の墓にも案内してくれた。彼が別れ際に「この村も大部良くなってきたよ」と言ったのは印象的であつた。

他に報告者がこの村でインタビューを行った人物に、前述のアルバーブのアブドルハキーム氏がいた。彼はイスラームの宗教的な素養のある人物だが、自分は日本人の調査隊のことは覚えていないという。そして彼がこの村のアルバーブに選ばれたのはターリバーン

の登場直後のことだったというのだが、その前後のことについては多くを語りたがらなかった。このアルパーブはターリバーンがカーブルを追われた後も村内の宗教的な権力を主な背景にして現在までその地位を保っているものの、将来的にはかなり不安定な立場に追い込まれているのではないかと思われた。

この村では前述のアブドラー氏以外はアルパーブをはじめ誰に尋ねても新憲法のことには全く知らないようだったし、積極的に知ろうとする素振りすら見せなかった。いわば息を潜めてヘラートや遠いカーブルの政治的変化の帰趨を見詰めている、というのが現状において正直なところなのであろう。アメリカの援助で建てられているという学校の校舎が妙に白々しく思い出された。

またこんなこともあった。アルパーブとのインタビューを終えてからしばらくして例の立派なモスクで子供たちを相手にしたあとそこを出て車に戻ると、丁度礼拝の時間になり運転手はモスクに入っていた。そこでしばらくモスクの外に居ると、やがて痩せて黒い服を着たモッラーが出てきて「人間の行動には四つの範疇がありまして、一つは……」と話し始める。そして「……という訳で、人間の行動には必ず目的というものがある。さて貴方はどういう目的でこの村にやってきていると調べているのか」と質問してきたので、30年前の大野隊の調査のことから説明を始めた。すると「少し前にアメリカ人の一団がこの村にやって来て、そこいらを駆け回っていた若い者に簡単な質問をし、どうやら学校が必要らしいということで今学校を建てている。あなたが日本で所属する機関としては我々になにをしてくれるお積りですか」

と畳み掛けてくる。その後モッラーはモスクに引っ込み、すぐに運転手が出てきて車でヘラートのホテルに戻ったのだが、運転手も件の話を立ち聞きしていたようで、車中で「モッラーなど居なくなった方がこの国のためだ」と吐き捨てるように言った。

カパーピアン村は残念ながら現在のところ宗教指導者に村の権力を牛耳られているようである。アルパーブのアブドルハキーム氏も宗教的人物であった。この村にターリバーン後の変化が及ぶのはいつのことだろうか、またどういう形でそのような変化は訪れるのだろうか。カパーピアン村は人口こそ急増しているものの、それに伴うべき社会的な変化の兆候はまったく見られなかった。教育にしても昔ながらの方法がそのまま続けられており、ヘラートにほとんど近接しているにもかかわらずこの30余年間町の周縁部として取り込まれることなく過ぎていったようである。大野は「ヘラートの町における労働市場が急速に拡大する可能性があるとは思われない。政治、経済の中心地ではあっても、工業の発展が全く見られないからである。しかし都市化の波は徐々にではあるが、隣接の農村に及び、変容を迫ってくる。カパーピアンもその一つの例であろう」と書いている<sup>(注10)</sup>。だがこの村の変化は1970年の時点での大野の予想を超えてさらに緩慢であったものと思われる。カパーピアンに限らずアフガニスタンの多くの農村社会がこの30余年間変わらずにあったとするならば、現代世界の中でずっと変わらずにあるということ自体がもつ意味合いの凄まじさを思わずにはいられない。この国を「復興する」と一口にいうが、一体どのような状態に「復させる」のか、また広大な地方農村部のどこ

から手をつけ、どの程度の人と金と時間を費やせばよいのか。誰も答えられる者はいないのではないだろうか。

### 憲法草案発表のなかで

たまたま報告者がアフガニスタン入りしてから数日後の11月3日に、カルザイ移行政権によって新憲法の最終草案が発表された。これは当初9月に発表される予定であったがスケジュールが大幅にずれ込んでこの日に至ったもので、アフガニスタンの体制を「イスラーム共和国」(jomhūri-ye eslāmi)と規定し、国王体制の存続については国家統合の象徴とする案や帰国したザーヒル・シャー一代に限るという案を含めて、本格政権の発足当初からいかなる形でも完全に否定される形となった。だが現在カルザイ政権を支えている北部同盟のラッバーニーは、数日後に早くもこの憲法草案の内容に批判的な発言をしている<sup>(注11)</sup>。その批判の焦点は大統領への権限集中ということであり、カルザイ政権に国家権力が集中しているとはいい難い現状で地方的権力の中央における発言力を温存する意図が込められたものと思われる。

ところでこの憲法草案の発表に対するカバール村での反応は上述のとおりきわめて消極的なものであったが、アフガニスタンの農村部がすべてこのような反応を示しているわけではなさそうである。憲法草案が発表された当日の11月3日に訪れたブーラク村(カールから南に70キロ程)では憲法のことを話題にすると「草案はもう発表されたのか」とこちらの方が訊ねられたし、また発表後に4WDでパーミヤンを訪れた帰路、幹線沿い

のタジクの村の少年に憲法草案の発表のことを知っているかどうか訊ねたところ「マクタブ(学校)で教えられた」との答えが返ってきた。おなじ質問をこの村の大人にすると、「ラジオで知った」との答えであった。カール周辺では農村部でも憲法草案に一定の関心が向けられていることが感じられたが、やはり強力な地方的軍閥の一人イスマイル・ハーンが強い権力を保っているヘラートの近郊ではカールの政情は遠い話なのかもしれない。この憲法草案は今年の12月にはカールで開催されるロヤ・ジルガ(国民大会議)の承認を経て正式に発布され、来年2004年の半ばには国民選挙による本格政権がスタートするというスケジュールになっている(追記:新憲法はその後ロヤ・ジルガでの議論と修正を経て、2004年1月4日に承認された)。

ところでパーミヤンまでの道は片道9時間で、そのうち7時間は未舗装のガタガタ道で



サイガン村近くのケシ畑。よく見るとアヘンを集めるため膨らんだ子房にナイフで傷をつけた痕がある。

あった。そこからさらに3時間ほど北に行ったところにあるサイガンという村を訪ねてみた。そこは現在もケシの栽培をしているということで、その現場を見てみたかったのである。行ってみると途中1カ所でケシ畑を見ることができたものの、サイガン村では既にケシを刈り取ってしまっていた。アフガニスタンのケシ栽培については国連機関の報告書<sup>(注12)</sup>でも指摘しているように、決してアフガン全土でケシが栽培されているわけではないが、パーミヤン周辺でも大っぴらに栽培されていることは確認できた。ケシは水を多く必要としな一方でその収穫には多くの人手を要する。具体的には花が散ったあとの子房にナイフで傷をつけて染み出してくる液を集めるのである。こうして集められた未精製のアヘンが1.5キロの1包みで1万アフガーニー（約2万円）、これがイギリスなど西欧の末端価格では数百倍になって取引される。この間の膨大なマージンの一部がアフガニスタンの地方的軍閥の主要な軍資金となって、戦乱状態を長引かせてきたことは言うまでもない。

だがこうした中にあっても、サイガン村ではひとつ新しい動きを垣間見ることができた。それはアフガン政府の農村部におけるシューラー創設活動である。この村には国連の施設（ハビタット）が置かれているのだが、その職員アフマド・シャキーブ氏はアフガン政府の意向を受けて同村の公的な意思決定機関であるシューラーの創設を促していくという活動に従事していた。彼の話では、シューラーの創設にあたってはアフガニスタンに伝統的に存在してきたシューラー（ジルガ）の観念を積極的に活用するということがあ

った。イランでは1999年に地方的なシューラーの選挙を政府の決定によって農村部も含め全国一斉に実施し、2003年に2期目の選挙が実施されたが、両国では地方における住民意識および社会構成の点で著しい相違を示しているのではないかと思われる。

## おわりに

アフガニスタンは確かに活況を呈していた。とくにカーブルは米国軍や国際治安支援部隊（ISAF）の駐留によって平和を維持し、軍人を含めて外国人の姿も目立った。だがこのような活況は、いわば重篤の状態にある病人の周囲で医者や看護婦が走り回っている表面上の活況に近いもので、決して健全なものではないと感じたことも事実である。

アフガニスタンの農村部では現在でも住民が周囲に壁を巡らしたガルエの中に住み、ジ



アヘンは一包み（1.5キロ）1万アフガーニー（約2万円）、ヨーロッパでの末端価格はその数百倍はする。手に持っている人物は案内人で、村人ではない。



ヨフト<sup>(注13)</sup>と呼ばれる2頭の牛を木で括りつけて土地を耕す古来の技術で農業を営んでいる。地方における農村社会の様相が近年になって著しい変貌を遂げたイランから見ると、まるでタイムスリップしたような感覚すら覚えるアフガニスタンの現状は、研究者的な立場からはさまざまな意味できわめて興味をそそられる対象であることは確かだが、広大な農村部を含むこの国のどこから手をつければ発展の軌道に乗せることが可能なのかを考えるとすると、暗澹たる思いを拭い去ることはできない。

『アフガニスタンの農村から』で扱われていたもうひとつの村であるピアルーヘイルむらは、カーブルの南70キロの山あいにある。確かな情報もないままカーブルのホテルで4WDをチャーターしてその村に向かったが、近くまで行って地元の警察官に「ピアルーヘイルむらはまだアルカイダとターリバーンの影響下にあり危険だ」と言われた。それでも未舗装のわき道に入り、村に向かって少し進んでみた。同行のボディガードが短銃をいつでも発射できるよう準備している。やがて遠くに村が見えてきた。「まだ進むか」とボディガードが2度、3度と訊ねたところでこれ以上前進するのを諦めた。なにか見えない境界線があってその向こうにじっと閉じ込められたように、村は小さく霞んでいた。

〔付記〕 この現地調査に途中まで同行し自らアフガニスタンのヴェール研究を行う傍ら

著者に欠けがちな視点を補ってくれた、若い研究者の後藤絵美氏(カイロ留学中)に謝意を表したい。

- (注1) 大野盛雄『アフガニスタンの農村から 比較文化の視点と方法』(岩波書店, 1971年)。  
 (注2) 尾崎三雄『日本人が見た 30年代のアフガン』(石風社, 2003年)。  
 (注3) 大野は「ピアルウケールむら」と表記したが現地ではこのままの発音では通じない。本稿では「ピアルーヘイルむら」と表記する。また同書の「カパーピアン」についても「カパーピアン村」とする。  
 (注4) 大野, 134ページ。  
 (注5) *Panj ketāb*, 『五書』の意。内容的にはサアディーやアッターールのペルシャ語古典文学からの名文の抜粋である。尾崎が1930年代にアフガンから持ち帰った資料の中に *Panj ganj* (『五宝』) という一書があるが、報告者が今回入手した *Panj ketāb* と版型が違うだけで印刷も内容も酷似している。  
 (注6) より詳しくいうと金曜日(注7)に村中の人々が集まって礼拝を行なう金曜モスクが二つ、日常的な礼拝の場所であるモスクが11という内訳になる。  
 (注7) 大野, 165ページ。  
 (注8) 大野, 166ページ。  
 (注9) 大野, 162~165ページ。  
 (注10) 大野, 167ページ。  
 (注11) *Kabul Weekly*, No. 93 (Nov. 12, 2003)。  
 (注12) United Nations, Office on Drugs and Crime, *The Opium Economy in Afghanistan: An International Problem*, Vienna, 2003。  
 (注13) ジョフトについては後藤晃『中東の農業社会と国家 イラン近現代史の中の村』(御茶の水書房, 2002年) 70~78ページが詳しい。

(すずき ひとし / 地域研究センター  
中東研究グループ)